

教師の生涯学習に関する調査研究

－高校教員の場合を中心に－

望月厚志
(茨城大学)
熊谷紀男
(常葉学園大学)
渋谷 恵
(常葉学園大学)
鈴木 守
(常葉学園大学)

【要旨】

今回の報告は、学校教員（教師）の「生涯学習」に関する継続研究の結果である。ここでは、前回の報告で今後の課題とした高等学校の教員の「生涯学習」の実態と学習ニーズについて調査・分析した結果を示した。その際、すでに行われた小・中学校教員の実態と比較し、その特徴―同質性と異質性―をあきらかにすることを試みた。その結果、高等学校教員の生涯学習の実態については、全体的には、義務教育段階の教師との同質性が高いということがあきらかとなった。しかし、その一方で、例えば、学習方法として、「個人学習」のニーズが高いなど、部分的ではあるが義務教育段階の教師とは異質な「学習ニーズ」が認められる。義務教育段階の教師の「学習ニーズ」と高校教師の「学習ニーズ」が異なっているということは、今後の教師の「学習課題」設定で配慮すべきことを示しているものと考えられる。

1. 本研究の目的と今回の分析について

今回の報告は、教師の「生涯学習」に関する継続的な調査研究の結果である。そのため、本研究の目的については、これまでもすでに述べているので、ここでは、その概略について述べるに留めておくことにする。

教育基本法の中にも「生涯学習」の明記が求められることが象徴しているように、社会生活を営む上で「生涯学習」の必要性が国民全体に浸透してきている。そのようなわが国の社会状況の中で、当然ながら、学校教育も生涯学習の基本的方針の中で営まれ、かつて生涯学習審議会がその答申の中で述べたように、また、生涯学習(教育)論の現代的な提唱者の一人であるポール・ラングランが主張したように、学校の教員(教師)が自ら進んで生涯学習に取り組むこと、すなわち、学校の教員が子どもたちや地域住民にとっての「生涯学習実践者」としての「モデル」を示すことが一層求められる社会状況となってきたとい

える。いわば、「教師の生涯学習」の現実化の時代を迎えているといえよう。しかしながら、その重要性がさまざまな場面で語られているのにも関わらず、これまでわが国において、どのように教師たちが「生涯学習実践者」としての「モデル」を示してきているのかはあきらかではない。

また、「教員の資質」が緊急の教育課題として認識され、その「養成」や「教育能力の向上」が求められている。そして、そのために、各種の教員の為の研修の機会が設定されているが、そのような公的な「職能の向上を図る教育機会」と「日常の教師の生涯学習」や「教師の学習ニーズ」との関連性については、これまで実証的なデータをもとにしてほとんど考察されてきていない。

これに関係して、Allan Dorig（オーストラリア・カトリック大学）は、「政府の教育政策には生涯学習に関してさまざまなことが語られているが、現実には少しも進んでいない。」という基本認識のもとに、「教師は専門的な職業生活を通じて学ぶということには議論の余地がなく、教育実践者という立場と仕事から生じるまさにその本質から生涯学習と深いかわりを持つのである。」と述べ、さらに、「教師の専門能力育成はフォーマル教育だけでは不十分で、それだけではだめなのである。真の専門能力育成には、教師個人個人の総合的な知識の基盤を広げることができる機会が必要となる。」¹⁾とも主張している。また、「教師は、自らの居住の場で一地域人として活動することが求められている。」²⁾とも述べられているように、他の職業人と同じように自由な時間を使い、様々な経験・体験をもとに地域と学校を結ぶ役割が求められているともいわれてきている³⁾。

このように、「教師の職務遂行上の能力の向上・育成」は、「教師の生涯学習」と切り離すことは不可能であり、それらの関連性をどのように図るのかということを経験することは現代の重要なかつ国際的な教育課題の一つとして考えられる。

このような課題解決のための基礎として、「教師の生涯学習」に関して実証的なデータを収集し、教師たちの「生涯学習実践者」としての「モデル」の現状の一端をあきらかにするとともに、それらのデータをもとに、最終的には、「日常の教師の生涯学習」と「教師の研修」と関連づけて「教師の養成・資質向上・職務能力向上の方略」を考察することが本研究の目的である。

日本の「教師の生涯学習」研究史からみた本研究の特色と意義については、すでに述べているのでここでは省略するが⁴⁾、今回の調査は、昨年度の研究の継続として、高校教員の場合の「日常生活上の生涯学習」の現状と学習ニーズ、学習阻害要因等を前回報告した小中学校の教員でのデータとの比較を行いながらあきらかにしたものである。アンケート調査は、静岡県内の公立の高等学校に勤務している教員（管理職をも含む）から無作為抽出を行い、800名を調査対象者として2005年2月17日から2月28日の期間に郵送法によって行われた。有効回収票は261票、回収率32.6%であった。

調査対象者の諸属性については次に示したとおりである。性別では、「男」63.2%、「女」36.8%の構成となっている。年齢別では、「20歳代」2.1%、「30歳代」21.5%、「40歳代」24.9%、「50歳代」42.5%、「60歳代」8.0%となっており50歳代が構成の中心である。勤年数別では、「10年未満」12.6%、「10年以上20年未満」26.1%、「20年以上30年未満」23.8%、「30年以上40年未満」37.5%となっており、年齢構成とも関連するが、勤務経験の長い人が約4割に達している。職位別では、「教諭」83.1%、「教頭」8.0%、

「校長」8.8%である。担当教科類型別では、「人文社会科学系（国語・社会）」25.6%、「自然科学系（数学・理科）」26.0%、「外国語」21.0%、「実技系（体育・芸術・技術・商業等）」26.7%の構成となっている。

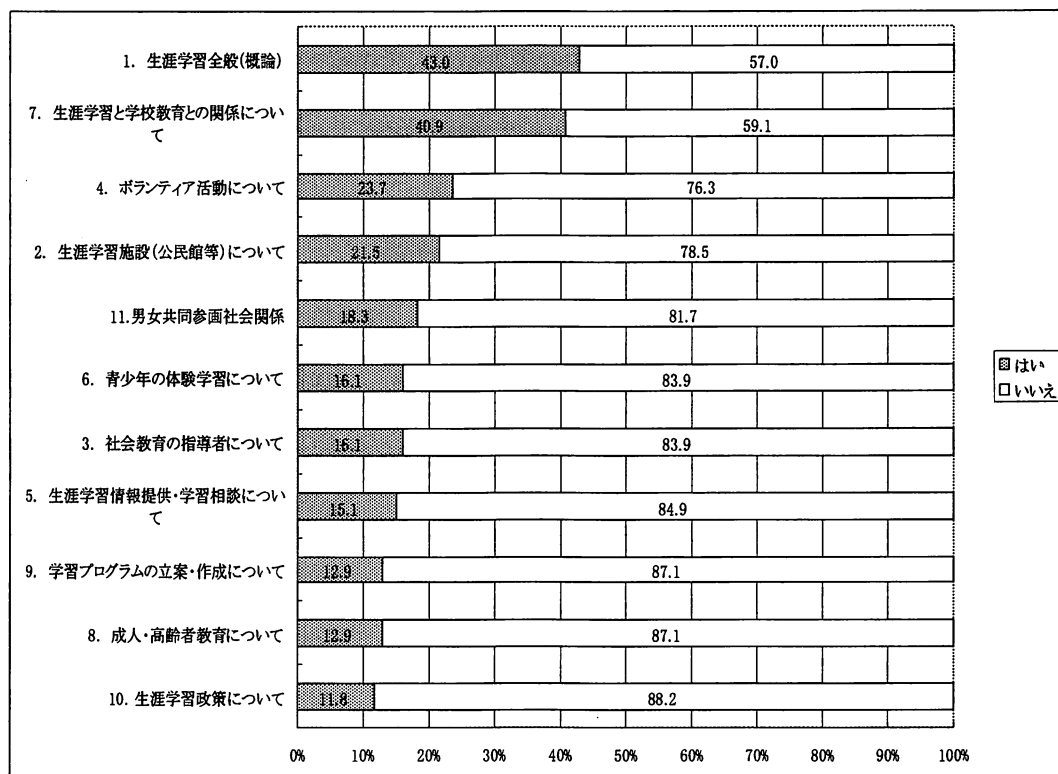
尚、今回の分析は、高校教員の場合には、「教科専門性」の影響がその「生涯学習」に色濃く反映しているのではないかと、つまり、義務教育段階の教師とは異質な状況が多くみられるのではないかとという仮説のもとで試みられた。（望月厚志・熊谷紀男）

2. 教師の「生涯学習」の実態の分析

(1) 「生涯学習」の学習経験とその内容

「生涯学習」そのものの学習経験についてみると、「学習経験がある」教員 35.6% 「学習経験がない」教員 64.4%となっており、全体としては「学習経験を持たない」教員が多い。学習経験率という点で、小中学校の教員の場合と比較すると⁵⁾、高校教員の方が3%低い数値を示している。

「生涯学習」そのものの学習経験がある教員に限定して、その学習の機会や場所についてみてみると、「各種団体等主催の講演会や講習会・研修会」（57.0%）「教職就任後の教員研修会」（49.5%）が多くなっている。また、小中学校の教員と比較して「大学の教員養成課程」（12.9%）という場合の数値が高くなっている。



第1図 生涯学習の学習内容

また、その学習内容についてみてみると図1のようになる。「生涯学習全般（概論）」と「生涯学習と学校教育との関係について」が約40%となっている。一方、「学習プログラムの立案・作成について」「成人・高齢者教育」「生涯学習政策」等は12%前後となってい

る。いずれの場合も、小中学校の教員でみられた傾向より低い数値に留まっている。例えば小中学校の教員の場合の生涯学習全般（概論）の学習経験者は約70%となっている。⁶⁾

(2) 教師の生涯学習の実態

教師になってからこれまで職務以外の時間や休日等に「生涯学習」を「行なってきた」と回答した高校教師は65.1%、「行なってこなかった」と回答した教師は34.9%となっている。小学校及び中学校の教師を対象とした前回の調査では、「行ってきた」と回答した教師は66.2%「行ってこなかった」と回答した教師は33.8%となっており⁷⁾、高校教師と小学校及び中学校の教師と同様の傾向を示している。

(3) 生涯学習活動－内容と程度

「生涯学習」を「行なってきた」教師に対して、学習内容項目毎に活動の程度、方法についてみると次のような結果となる。学習経験率の高い学習内容としては、「指導法、教材研究など教授的力量の形成」、「美術、映画、演劇、音楽などの芸術鑑賞」、「ジョギング、ゴルフ、スキー、体操、散歩など運動一般」、「インターネットなどコンピュータ、情報処理に関する学習」、「英語など外国語の学習」があげられる。逆に、学習経験率の低い学習内容としては、「地域の学習活動の指導・支援」、「加齢や障害についての理解、介護に関する学習」、「ボランティア活動への参加」、「学校経営、教育法など経営に関する学習」、「ストレス解消、カウンセリングなど、こころの健康に関する学習」の順になっている（第1表参照）。高校教師と小・中学校の教師の調査結果⁸⁾を比較すると、高校教師は「英語など外国語の学習」、「インターネットなどコンピュータ、情報処理に関する学習」、「歴史、経済、環境など人文・社会・自然科学に関する学習・研究」の学習経験率が小・中学校の教師に比べて高くなっている。

第1表 生涯学習活動－内容と程度

（単位：％）

	大変よく 行って きた	よく 行って きた	時々 行って きた	たまに 行って きた	行って こなか った
1. 指導法、教材研究など教授的力量の形成	14.7	30.0	20.7	16.7	18.0
2. カウンセリング、生徒理解など生徒指導に関する学習	4.8	14.4	24.0	29.5	27.4
3. 学校経営、教育法など経営に関する学習	2.8	7.7	12.7	18.3	58.5
4. 英語など外国語の学習	14.5	14.5	16.4	11.8	42.8
5. インターネットなどコンピュータ、情報処理に関する学習	8.1	23.5	22.8	21.5	24.2
6. 歴史、経済、環境など人文・社会・自然科学に関する学習・	11.6	15.8	15.8	28.1	28.8
7. ジョギング、ゴルフ、スキー、体操、散歩など運動一般	15.6	16.2	22.7	27.3	18.2
8. 健康法、生活改善など健康の維持、増進に関わる学習	4.2	11.9	15.4	26.6	42.0
9. ストレス解消、カウンセリングなど、こころの健康に関する学習	4.8	6.8	13.0	27.4	47.9
10. 料理、日曜大工など家庭生活に関わる学習	4.9	9.7	18.1	16.0	51.4
11. 育児・家庭教育など子育てに関する学習	4.3	9.2	12.1	19.9	54.6
12. 加齢や障害についての理解、介護に関する学習	0.7	5.7	10.7	15.7	67.1
13. 美術、映画、演劇、音楽などの芸術鑑賞	12.7	22.9	24.2	29.9	10.2
14. 合唱・演奏、華道・茶道、舞踊などの芸術活動	15.5	11.5	11.5	8.8	52.7
15. 釣り、キャンプなど野外活動・自然体験	6.3	9.7	23.6	22.2	38.2
16. 町内会、子ども会、PTAなどの活動への参加	6.9	13.1	25.5	17.9	36.6
17. ボランティア活動への参加	5.6	4.9	12.0	23.9	53.5
18. 地域の学習活動の指導・支援	2.1	4.3	5.7	10.7	77.1

これらの内容について、担当教科別でみると、外国語の教師では「英語など外国語の学

習」、国語、社会等の人文社会学系の教師では、「歴史、経済、環境など人文・社会・自然科学に関する学習・研究」の学習経験率が高い等、一部の内容においては、高校教師の教科の専門性が学習経験率に反映されている。また、性別でみると、女性教師では、「合唱・演奏、華道・茶道、舞踊などの芸術活動」、「育児・家庭教育など子育てに関する学習」の経験率が高いが、「地域の学習活動の指導・支援」の経験率が低く、女性教師の8割以上が「行ってこなかった」と回答している。

(4) 生涯学習活動の方法、時間・期間

生涯学習活動の方法については、「体験・実習・実技・実演」の指摘率が高い。「情報処理」、「スポーツ」、「健康法」、「家庭生活」、「芸術活動」、「野外活動」、「町内会」、「ボランティア」、「地域支援」で最も指摘率が高くなっている。次いで、「読書・本の利用」の指摘率が高く、「教材研究」、「学校経営」、「人文自然科学研究」、「こころの健康」、「家庭教育」で最も指摘率が高い。また、「ラジオ、テレビ等放送視聴」については、「外国語」、「加齢・介護」で最も指摘率が高くなっている。このように「体験・実習・実技・実演」「読書・本の利用」「ラジオ、テレビ等放送視聴」等の個人学習の指摘率が全体として高くなっている。(第2表参照)。

第2表 生涯学習活動—方法

(単位：%)

	読書・本の利用	ラジオ、テレビ等放送視聴	インターネット等情報機器	講義・講演	体験・実習・実技・実演	グループワーク、討論	展示、演奏、実演見る聞く	通信教育	その他	複数の方法
1. 教材研究	46.3	1.6	1.6	17.9	8.1	10.6	0.8	2.4	0.8	9.8
2. 生徒指導	32.7	0.9	2.8	40.2	6.5	8.4		1.9	1.9	4.7
3. 学校経営	52.5			32.8		4.9		1.6	1.6	6.6
4. 外国語	19.3	46.6	3.4	4.5	9.1	2.3		3.4	1.1	10.2
5. 情報処理	17.1	1.8	28.8	8.1	33.3		0.9		2.7	7.2
6. 人文自然科学	53.3	3.8	4.8	14.3	8.6		7.6			7.6
7. スポーツ		1.6			80.0				16.0	2.4
8. 健康法	20.5	26.5	2.4	10.8	33.7				2.4	3.6
9. こころの健康	36.0	6.7	1.3	30.7	13.3	6.7				5.3
10. 家庭生活	25.0	13.2	1.5		52.9				1.5	5.9
11. 家庭教育	46.9	15.6		10.9	18.8			1.6		6.3
12. 加齢・介護	24.4	26.7	2.2	11.1	17.8	4.4		4.4		8.9
13. 芸術鑑賞	0.7	4.3		2.2	11.5	0.7	74.1		1.4	5.0
14. 芸術活動		2.9			75.7	1.4	15.7		1.4	2.9
15. 野外活動	1.1			2.3	86.4	1.1	1.1		5.7	2.3
16. 町内会		1.1		1.1	62.0	6.5	2.2		26.1	1.1
17. ボランティア			1.6	6.3	73.4	3.1	1.6		12.5	1.6
18. 地域支援				34.4	50.0	3.1			9.4	3.1

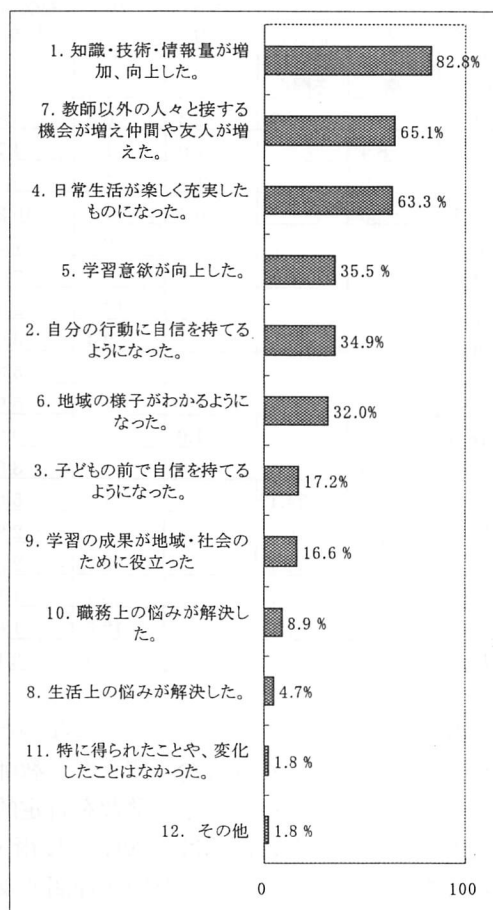
(5) 生涯学習の成果

「生涯学習」の成果についてみると、「特に得られたことや、変化したことはなかった」と回答した教師は1.8%ときわめて少数であり、「生涯学習」を「行なってきた」教師の大部分は、全体として「何らかの成果を得ることができた」と考え、生涯学習を肯定的にする評価する傾向がみられる。「生涯学習」の成果として最も多い指摘は、「知識・技術・情報量が増加、向上した」である。続いて「教師以外の人々と接する機会が増え仲間や友人が増えた」、「日常生活が楽しく充実したものになった」と、「知的な向上」と「日常生活

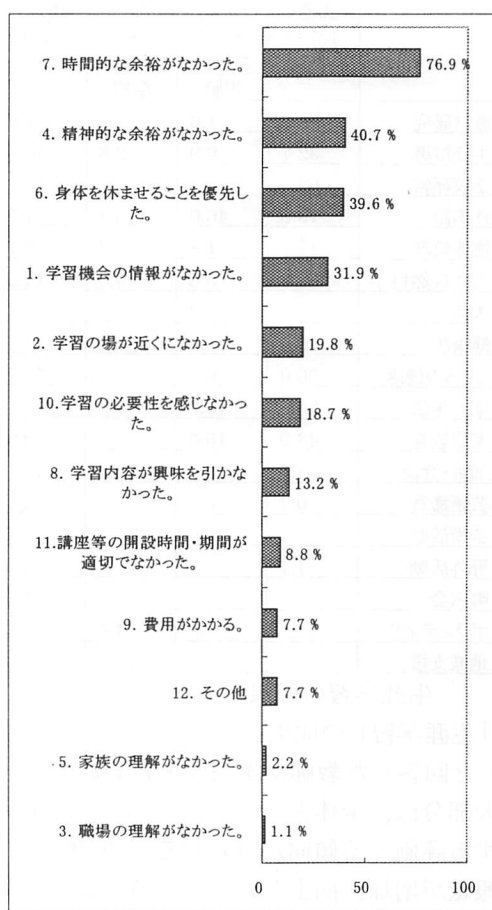
上の充実感」を「生涯学習」の成果としてあげている。その一方、「学習の成果が地域・社会のために役立った」、「職務上の悩みが解決した」、「生活上の悩みが解決した」、という「社会貢献」や「悩み解決」の点を指摘した教師は数量的には少ない(第2図参照)。これらの傾向は、いずれも小・中学校の教師に対する調査⁹⁾の結果と共通している。

(6) 生涯学習の阻害要因

教員になってから職務以外の時間や休日等に「生涯学習」を「行なってこなかった」教師のその主な理由・原因についてみてみると次のような結果となる。最も高い指摘率を示す項目は「時間的な余裕がなかった」で、「生涯学習」を「行なってこなかった」教師の8割近くが指摘しており、続いて「精神的な余裕がなかった」、「身体を休ませることを優先した」ということを約4割が指摘している。「職場の理解がなかった」、「家族の理解がなかった」と「周囲の無理解」の指摘率は量的には少ない(第3図参照)。このような傾向は小学校及び中学校の教師を対象とした調査¹⁰⁾でも同様の結果が示されており、教師の生涯学習全体に関する主要な阻害要因とみられる。一方、高校教師は、小学校及び中学校の教師と比較して「学習の必要性を感じなかった」の指摘率が低い、「学習機会の情報がなかった」の指摘率が高いという特徴がみられ、その相違点が注目される。(鈴木 守・望月厚志)



第2図 生涯学習の成果



第3図 生涯学習の阻害要因

3. 教師の生涯学習の学習ニーズの分析

(1) 教師の生涯学習に対する全体的な希望

生涯学習活動に関する今後の活動意欲について全体的にみると、今後、生涯学習活動を「行いたい」という回答が全体の約9割（「非常に思う」31.3%、「思う」46.7%、「少し思う」11.6%）を占めている。小中学校教員を対象に行った2004年の調査¹¹⁾と比較すると、積極的に生涯学習活動を行いたいと考えている教員の割合は、高校教員（「非常に思う」31.3%、以下同）が最も高く、以下、小学校教員（28.6%）、中学校教員（19.1%）の順であった。

(2) 生涯学習活動の希望—内容と程度

生涯学習を「行いたい」と考えている教師に限定し、希望する学習内容とその程度についてみると、「ぜひとも行いたい」「行いたい」活動としては「芸術鑑賞」が最も高く、以下「運動一般」「コンピュータ・情報処理」「教授能力の向上」「外国語学習」などが挙げられている（第3表参照）。特に「芸術鑑賞」「運動」に対しては「ぜひ行いたい」との希望が高い。「ボランティア活動」「地域の学習活動の指導・支援」については、必要性を感じないとする回答は2割程度と少ないものの、「ぜひ行いたい」とする回答は非常に低くなっている。先にみた生涯学習経験とあわせて検討すると、関心がないわけではないが、これまで実際に参加した経験は少なく、また今後、実際に参加することに対しても消極的な様子がうかがえる。また「町内会等の参加」については、全体の約6割がこれまで何らかの形で活動に関わってきているものの、今後も行いたいとする希望は低い（第3表参照）。

第3表 生涯学習活動の希望—内容と程度

(単位：%)

	ぜひとも 行いた い	行いた い	どちら ともい えない	余り必 要性を 感じな い	全く必 要性を 感じな い
1. 指導法、教材研究など教授の力量の形成	24.4	43.9	13.2	9.8	8.8
2. カウンセリング、生徒理解など生徒指導に関する学習	11.9	50.2	21.9	8.5	7.5
3. 学校経営、教育法など経営に関する学習	7.2	23.2	19.1	20.6	29.9
4. 英語など外国語の学習	29.5	37.7	14.0	11.6	7.2
5. インターネットなどコンピュータ、情報処理に関する学	23.4	47.8	15.6	4.4	8.8
6. 歴史、経済、環境など人文・社会・自然科学に関する学	20.4	45.6	18.0	8.3	7.8
7. ジョギング、ゴルフ、スキー、体操、散歩など運動一般	31.1	45.5	8.6	5.3	9.6
8. 健康法、生活改善など健康の維持、増進に関わる学習	16.2	44.6	20.1	7.8	11.3
9. ストレス解消、カウンセリングなど、こころの健康に関	13.5	38.5	18.5	13.5	16.0
10. 料理、日曜大工など家庭生活に関わる学習	11.6	30.2	24.1	16.1	18.1
11. 育児・家庭教育など子育てに関する学習	5.1	22.1	24.1	16.4	32.3
12. 加齢や障害についての理解、介護に関する学習	7.2	34.4	29.2	12.8	16.4
13. 美術、映画、演劇、音楽などの芸術鑑賞	38.0	43.1	9.7	5.1	4.2
14. 合唱・演奏、華道・茶道、舞踊などの芸術活動	19.0	29.8	21.0	12.7	17.6
15. 釣り、キャンプなど野外活動・自然体験	17.3	32.2	19.3	14.4	16.8
16. 町内会、子ども会、PTAなどの活動への参加	6.6	16.8	40.3	18.9	17.3
17. ボランティア活動への参加	8.0	34.5	36.0	10.0	11.5
18. 地域の学習活動の指導・支援	7.5	27.0	37.0	11.0	17.5

これらの内容について、性別でみると、女性教師では、「芸術鑑賞」「外国語学習」「芸術活動」を「ぜひ行いたい」とする割合が高い一方、「学校経営」については「全く必要性を感じない」と回答が約4割を占めた。これに対し男性教師では、芸術・外国語に関する希望は女性教師より低いものの、「学校経営」「地域の学習活動の指導・支援」については「ぜ

ひ行いたい」「行いたい」とする割合が高い。男性教師が教師としての職業に直接関わる学習への希望が高いのに対して、女性教師は幅広い領域での生涯学習活動を希望する傾向がみられる。こうした違いは、単に男性と女性の関心の差で説明できるものではなく、ある特定の活動に男性あるいは女性が参加しにくい何らかの要因があるものと想定できる。本調査は性別ごとの差異をあきらかにしたにとどまるが、その要因については、今後、検討が必要であろう。

勤務年数別では、勤務10年未満の教師では「教授的力量の形成」「生徒指導に関する学習」「子育てに関する学習」を挙げる者が多かった。前回行った小中学校教員の調査結果¹²⁾とあわせてみると、小中学校教員に比べ、高校教員では「人文・社会・自然科学に関する学習」に対する興味が高い一方、「学校経営」「町内会等の活動」への希望は低いことがあきらかになった。

(3) 生涯学習活動の希望－方法

学習方法については、それぞれの活動の形式によるものの、一般的に「読書・本の利用」「講義・講演」「体験・実習・実技・実演」による学習を希望する割合が高かった（第4表参照）。この結果を、これまで行ってきた学習方法（第2表）と比較すると、「教材研究」「生徒指導」「学校経営」「人文・社会・科学研究」「こころの健康」など、従来、「読書・本の利用」「講義・講演」で行ってきた学習内容についても、「体験・実習」型の学習を希望する割合が高くなっている。「教材研究」「生徒指導」「学校経営」など職能向上に関する分野では、「グループワーク・討論」への希望が高く、「共同学習」「参加型学習」への期待がうかがえる。メディアの活用についてみると、これまで「ラジオ・テレビの活用」が多かった「外国語」「健康法」「加齢・介護」の学習、「コンピュータなど情報機器の活用」が目立った「コンピュータ・情報処理」に関する学習においても、「体験・実習」型への希望

第4表 生涯学習活動の希望－方法

(単位：%)

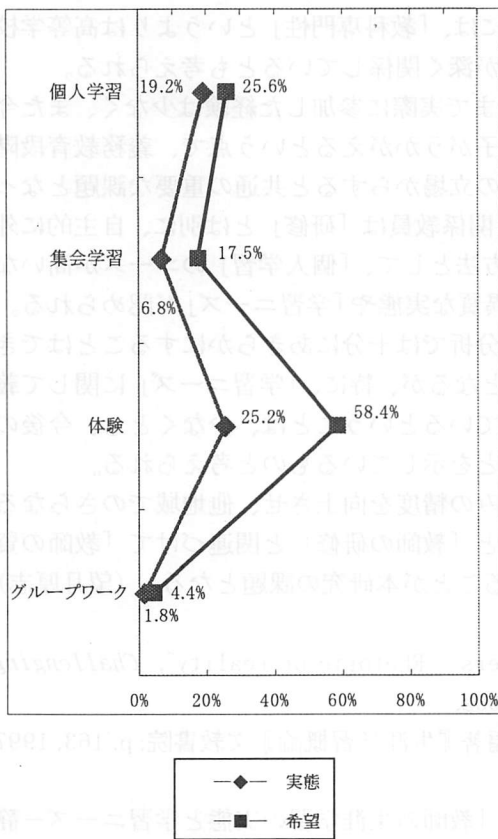
	読書・本の利用	ラジオ、テレビ等放送視	インターネット等情報機器	講義・講演	体験・実習・実技・実演	グループワーク、討論	展示、演奏、実演見る聞く	通信教育	その他	複数の方法
1. 教材研究	31.7	2.2	1.1	29.0	15.8	13.1		0.5	0.5	6.0
2. 生徒指導	20.0	1.7	1.1	37.8	18.9	12.8	1.1	0.6	1.1	5.0
3. 学校経営	31.3	1.6	2.3	45.3	5.5	7.0		0.8	1.6	4.7
4. 外国語	12.2	27.1	4.8	7.4	37.2	0.5		4.3	0.5	5.9
5. 情報処理	7.1	4.3	24.5	8.7	50.0	0.5		0.5	0.5	3.8
6. 人文自然科	36.7	5.6	2.8	30.6	10.6	1.1	5.6	0.6	0.6	6.1
7. スポーツ	2.2	1.6	1.1		86.4		1.1		4.9	2.7
8. 健康法	12.6	10.9	4.0	20.7	42.5	0.6			1.7	6.9
9. こころの健	15.1	9.4	3.1	29.6	31.4	5.0			1.3	5.0
10. 家庭生活	10.5	7.2	2.0	2.0	71.2	1.3			1.3	4.6
11. 家庭教育	24.8	10.4	4.0	30.4	20.0	5.6			0.8	4.0
12. 加齢・介護	18.8	10.4	3.9	22.1	33.8	2.6	0.6		1.3	6.5
13. 芸術鑑賞	1.5	2.0	1.0	2.0	16.4	1.0	71.1		1.0	4.0
14. 芸術活動	1.9	1.9	0.6	1.3	66.7	1.3	23.3		0.6	2.5
15. 野外活動	2.5	1.9	1.3	1.3	86.8	0.6	3.1		0.6	1.9
16. 町内会	3.3	1.3	0.7	2.7	66.7	6.7	2.0		16.0	0.7
17. ボランティア	1.8		1.8	4.2	75.4	2.4	1.2		12.0	1.2
18. 地域支援	2.0	0.7	1.3	10.5	62.5	8.6	0.7		11.8	2.0

が高くなっている。

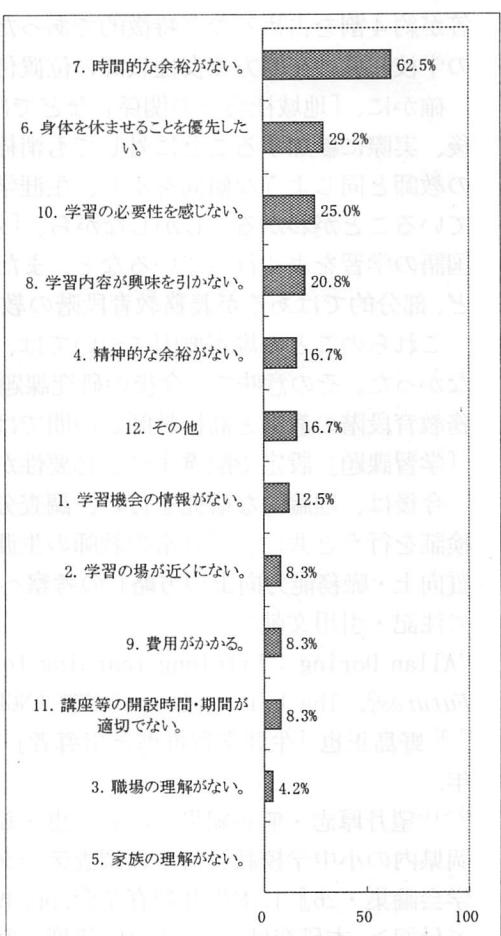
こうした動向をより明確に示すため、学習方法全体を4つのカテゴリー（個人学習、集会学習、体験、グループワーク）に分類したうえで比較対照を行った結果が第4図である。この図をみると、全体として「体験型」の学習への希望が高まっていることがわかる。この傾向は、小中学校教員を対象にした調査結果¹³⁾と同様であるが、その一方で、高校教師の学習方法として、「個人学習」のニーズが高いという異質の傾向もみられる。

(4) 生涯学習を希望しない理由

今後、生涯学習を行おうと「あまり思わない」（9.3%）、「全く思わない」（1.2%）と回答した者に対して、その理由を複数回答で尋ねた結果が第5図である。これによれば、「時間的な余裕がない」との回答が最も高く、以下、「身体を休ませることを優先」「学習の必要がない」「学習内容が興味を引かない」が続いている。（第5図参照）。この結果を小中学校教員の回答¹⁴⁾と比較すると、小中学校教員では「時間」「身体」に続いて精神的なゆとりのなさが上位だったのに比べ、高校教員では「学習の必要がない」「学習内容が興味を引かない」など、学習自体あるいは学習内容に関心が持てない状況がうかがえる。（渋谷 恵）



第4図 生涯学習活動の方法—実態と希望との比較—



第5図 生涯学習を希望しない理由

4. 高校教師の生涯学習の実態と学習ニーズ—今回の分析のまとめと今後の課題

今回の分析は、義務教育段階の教師と比較して、高等学校の教師の「生涯学習」の実態並びにそれに対する考え方の違いや同質性を把握することを目的に行われた。その結果、全体的には、義務教育段階の教師との同質性が高いと結論づけることができる。

高校教師の場合にも、義務教育段階の教師と同様に、これまでの「生涯学習」実践率並びに今後の学習希望率ともに一般の人々よりもかなり高い傾向を示している。また、生涯学習の成果も高く評価している。生涯学習の阻害要因でも、いわゆる「教師の多忙観の問題」が指摘され、小学校及び中学校の教師の場合と同様の結果となり、教師の「生涯学習」の共通の阻害要因となっている。

その一方で、高校教師の場合には、小学校及び中学校の教師と比較して、「学習機会の情報がなかった」の指摘率が高いことや学習ニーズにおいて「人文・社会・自然科学に関する学習」に対する興味をより高く示す一方、「学校経営」「町内会等の活動」への希望は低いという特徴がみられ、その相違点に注目される。特に、「学校経営」については「必要性を感じない」と回答が約5割以上に達して、義務教育段階の教師との違いが鮮明となっている。さらに、女性教師では、「学校経営」については「全く必要性を感じない」という回答が約4割を占めるなど特徴的であった。これには、「教科専門性」というよりは高等学校の学校経営の在り方や女性教師の位置付けなどが深く関係しているとも考えられる。

確かに、「地域社会との関係」などでは、これまで実際に参加した経験は少なく、また今後、実際に参加することに対しても消極的な様子がうかがえるという点で、義務教育段階の教師と同じような傾向を示し、生涯学習推進の立場からすると共通の重要な課題となっていることがわかる。しかしながら、「外国語」関係教員は「研修」とは別に、自主的に外国語の学習をよく行っているなど、また、学習方法として、「個人学習」のニーズが高いなど、部分的ではあるが義務教育段階の教師とは異質な実態や「学習ニーズ」が認められる。

これらのことの規定要因については、今回の分析では十分にあきらかにすることはできなかった。その意味で、今後の研究課題の一つとなるが、特に、「学習ニーズ」に関して義務教育段階の教師と高校教師の間では異なっているということは、少なくとも、今後の「学習課題」設定で配慮すべき必要性があることを示しているものと考えられる。

今後は、理論的な研究を行い、調査分析枠組みの精度を向上させ、他地域でのさらなる検証を行うと共に、「日常の教師の生涯学習」と「教師の研修」と関連づけて「教師の資質向上・職務能力向上の方略」の考察へと進めることが本研究の課題となる。（望月厚志）
＜注記・引用文献＞

¹⁾ Allan Doring : "Lifelong learning for teachers : Rhetoric or reality", *Challenging Futures?*, The University of NEW ENGLAND, 2002.

^{2) 3)} 野島正也「生涯学習推進と指導者」吉川弘編著『生涯学習概論』文教書院, p. 163, 1997年.

^{4) ~14)} 望月厚志・熊谷紀男・渋谷 恵・鈴木 守「教師の生涯学習の実態と学習ニーズ—静岡県内の小中学校教員対象の調査データをもとに—」日本生涯教育学会編『日本生涯教育学会論集・26』日本生涯教育学会, pp. 49~58, 2005年.

＜付記＞ 本研究は、「平成 16 年度 常葉学園大学共同研究費」（共同研究者：望月厚志、熊谷紀男、渋谷 恵、鈴木 守）による研究成果の一部である。